

回覧																			
----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

アクティブ長洲小

長洲町立長洲小学校だより
 令和2年12月24日第15号
 文責 校長 川富 一弘

いつもとはちがう冬休みへ

2020年の授業が今日で終わり、子ども達は25日から1月6日まで13日間の冬休みに入りました。進級してこれまで通常より40日程少ない登校日でしたが、大きな行事は縮小しながらも実施することができたことはいうれしく思います。とはいえ、新型コロナウイルス感染は拡大の一端をたどっており、この冬休み期間中でまた広がるのではと心配をしています。

ゴートウキャンペーンも結局全国一斉中止になり、国を挙げた取組に何割の人々が協力するのか分かりませんが、ただただ自分自身でできる範囲の感染予防対策を継続していくしかありません。「できるだけ家から出ないこと!」「出るときはしっかりマスクを付けて、「蜜を避けること」を意識して過ごしていきたいものです。ご家庭の行事、地域の行事もあるかと思いますが、くれぐれもご配慮をお願いいたします。

ながすサミットを開催しました

18日(金)の午後、児童会、PTA、教職員、地域(学校運営協議会)、行政(町生涯学習課)のそれぞれ代表者が集まり、来年度の学校づくりの参考となるアイデアや意見を出し合ってもらいました。

児童会からは8つの委員会の代表者が、それぞれに課題を報告し、それに対して各団体の代表からアドバイスをもらうことができました。昨年までは、児童と学校運営協議会の2者間の話し合いだったものを5者に広げて行うことで、実に様々なお立場からの話を窺うことができ、90分という短い時間でしたが、実に有意義な時間になりました。

児童の質問の中には、あいさつを活発にしたいという思いから、長洲中の生徒会へ質問したところ、一緒にやりましょうとのメッセージが入ったビデオレターを長洲中生徒会からいただきました。また、駅を花いっぱいになりたいという願いには、生涯学習課より、町民育成会議と一緒に取り組めばどうでしょう、等と助言をいただくこともできました。長洲小はこうしてみんなの力でみんなで作る学校を大切にします。誰か一人のための学校ではなく、子ども達や親の願い、地域や町全体の願いが学校の姿として浮かび上がるのです。会の総括は、熊本大学教育学部大学院シニア教授の太田恭司先生に「これからの学校、これからの教育」という視点でまとめていただき、実りあるサミットとなりました。



<熊本大学太田シニア教授による助言>

2020を振り返って

この時期になると、一年を振り返る機会が様々な場面で出てきますが、本通信をお読みいただいている方はいかがでしょうか。さて、年末を迎え、私なりの気づきと振り返りについてまとめてみたいと思います。

①言葉の大切さ

小学校では、いろんな教科がある中で、最も授業時数が多いのが国語の授業です。低学年では毎日1～2時間、高学年でも1時間は学習することになっています。これは今に始まったことではないのですが、こんなに母国語に慣れ親しむ時間があるのに、日常の学校で聞く言葉は決して綺麗な言葉ばかりではありませんし、中にはあまり使って欲しくない言葉を耳にすることもよくあります。例えば、「ヤバイ」。本来はどちらかと言えば、下品な言葉でしたが、現在では格上げされて、特段にうれしい時、おいしい時、等につかわれています。確かに言葉の意味は時代の流れとともに変わっていくものだと思います。それは仕方のないこととしても、言葉の持つ本来の意味や歴史を知ることは日本語のネイティブスピーカーとして必要な学習だと思います。毎日ある国語の授業の中で、ぜひ美しい日本語をマスターできるよう国語の授業の充実を図っていきたいと思っています。

②子どもを叱ることの難しさ

学校でも家庭でも、子どもを「叱る」場面はよくあります。ご家庭ではいかがですか？上手に叱れていますか？自分(親、教師等の大人)の思うとおりに動かない子どもに対して「怒鳴る」「怒る」ことが「叱る」こととは根本的に違うことは皆さんお分かりだと思いますが、では学校で子ども達を預かる私たちが大切にしていることは何だと思えますか。

それは、子どもに「納得させることができるか」です。なぜ今叱られているのか、先生はどんなことを伝えようとしているのか、子どもが腑に落ちることが肝心なのです。つまり、子どもが納得するような叱り方ができているか、ということです。納得すれば、子どもはそれを社会的ルール、モラルとして学び習得していきます。学校でも教育のプロとして子どもへの関わり方を先生方に振り返るよう話しています。分かっているらっしゃると思いますが、暴力、暴言は躰にも教育にもなり得ないことをお互い肝に銘じておきたいものです。大人はそれだけ自身の心の懐の大きさが求められるということになります。

③コロナを正しく恐れる

なんととっても今年は新型コロナウイルス感染症のニュースがない日がありませんでした。4月も授業3日後からすぐさま臨時休校となり、途中登校日を設けながら、通常の学校生活が送れるようになったのは6月からでした。誰も経験したことのない対応、運動会は秋に延期し、10月開催も昼までの実施となりました。ここまで様々な行事が中止となり、予定を立てては変更し、常に教育効果の高いもの、子どもが楽しみにしていることを優先しながら12月までこれたという印象です。

ただ、コロナに関するいろんなデータも出そろってきており、3密を避けることを基本とする感染予防のノウハウも分かってきました。コロナ感染者に対する差別問題も配慮しなければならないことですが、自分だけではなく相手も守るためのマスクというように、自分がコロナに感染しているつもりで行動することが大事なんだと思います。今後も長い付き合いになりそうです。今やマスクは出かける際のハンカチ、ティッシュに並ぶ携行品になりました。いい意味での慣れが浸透しつつあります。

④地域の皆さんの支えに感謝

今年一年を振り返って率直にある思いとは、それは「学校は実にいろんな方々に支えられている」という実感です。5、6月、巷で話題になっていたマスク高騰…。これまでマスクを探すことなんてほとんどなかった人も、さすがに朝から薬局やスーパー、ドラッグストアに並んだ人も多かったことでしょう。これまで見たこともないような値段で売ってあり、この先どうなるんだろうと、いっそう新型コロナウイルスの脅威を感じました。その騒ぎの中、本校には地域の縫製工場から、また町婦人会の方から、また中には個人で、と手作りのマスクを全児童に寄贈していただきました。授業再開の準備の中、どうしても児童数分のマスクを手に入れることができなかつた時期でしたので、本当に有り難く、感謝の気持ちでいっぱいになりました。支えてもらっている実感とともに、地域から大切に思われていること、また同時にどうお返しをすればよいのか、と焦る気持ちを抱いたことを思い出します。

あらためて、本年は大変お世話になり、有り難うございました。新年もどうぞよろしく願いいたします。